水牛通信　毎月１回10日発行　1985年12月10日発行　通巻77号　1980年５月23日第三種郵便物認可

# 水牛通信

人はたがやす　水牛はたがやす　稲は音もなく育つ


工房訪問⑥　「ふるさと十勝」　2
——うちの雑誌はコーディネイター

キリコのコリクツ　玖保キリコ　12

ワープロ入門・弁解篇　津野海太郎　15

料理がすべて　田川律　24

映画時評　鎌田慧　26

音楽時評　高橋悠治　28

水牛かたより情報　30


VOL.7 NO.12
毎月１回・10日発行
定価200 円

# 工房訪問⑥「ふるさと十勝」

## うちの雑誌はコーディネイター

北海道・帯広市のタウン誌「ふるさと十勝」は今年十周年を迎えた。本誌読者ならすでにご存知のように、その記念行事として「水牛楽団、如月小春＋ＮＯＩＳＥ――野の音コンサート」を五月に行った。

それから半年、周囲の山々には雪が降る帯広を訪れ、編集長、発行人でもある佐藤隆則さんに、話を聞いた。

田川「こないだはお世話になりました。『野の音コンサート』は赤字だったでしょ。どのくらい？」

佐藤「そうね、三十万ぐらいかな」

田川「それは、結局誰が負担したの」

佐藤「ま、ぼくでしょうね」

林（「ふるさと十勝」の編集部員で、経理担当でもある）「それがさ、ホントはもっと早く借金返せたのに、佐藤さんたら、絵買っちゃうんだもの」

田川「絵って？」

佐藤「友だちの絵ですよ。そこがぼくのダメなとこで、自分の近くにガンバッテル人がいると、すぐ応援してあげたくなる。絵も友だちが描いているんでね、つい」

田川「だけど、テレビで三回も流れたから読者もふえたでしょ」

林「ぜーんぜん。帯広ではちっとも増えなくて、本州とか、そういうとこから注文は来たけどね」

田川「だいたい、あれはどういう人が読んでるの？　年齢とか、職業とか」

佐藤「そういうのわからないのよね。ま、若い人は、字が多いからって敬遠する人が多いんじゃない。もちろん若い人で読んでる人もいるけど」

田川「だいたい、どこで売ってるの。本屋？　それに、広告出してくれてる飲み屋さんにおくとか」

佐藤「本屋さんね。広告出してくれるとこには置かない。そういうとこへ置くと、本屋で売れなくなるからね」

林「それと、定期購読者が七百人ぐらいいるかな」

田川「へえぇ、それだけで『水牛通信』とおんなじ数やん」

林「意外と読まれているのが病院」

田川「え、病院？　なんでまた」

林「昔から。うちの事務所の近くの病院なんだけど、毎月五十冊持って行って完売するもの」

田川「五十も？　患者さん、それともお医者さんとか、看護婦さん」

佐藤「患者さんですよ。外のこと知りたいから、読んでんじゃない」

とこうするうちに、車は帯広市内から一時間あまりの然別湖畔の温泉宿についた。いつの間にか、雪。細かい粉雪が音もなく舞っている。季節はずれの宿には、ほとんど客がいない。

佐藤「じつは、ぼく、ここの温泉宿の主人になるところだった。何年か前に話がきて、考えたけど、結局やめちゃった。これだけのとこにおさまったら宿なくなるまで、『ふるさと十勝』好きなことできると思ったけど、でも、結局、そうなったら、なんもできないしね」

＊

あくる日。昨日の雪は晴れあがり、あたりの白さがまぶしい。しかし、雲の脚は迅く、またすぐに粉雪が舞う。午前十一時、ぼくたち三人は出発。

田川「ほなら、そろそろテープ廻すで」と、車の中でテープが廻り出す。

佐藤「どんなことしゃべるんですか」

田川「ほらまた、テープが廻った途端に、よそ行きの言葉になって。でも、この車、なんかさぶいな。どっかから風入って来るで」

佐藤「ごめん、今こっちの窓、開いてるの」

林「風を動かさないでほしいわ」
田川「ホンマやで」
佐藤「自分の声、あとで聞くのイヤらしいから苦手ですよ」
田川「ぼくかてや。きちゃない声やねんもん。いつもこんな声でしゃべってんのかと思たら、聞かされる相手に同情してまうわ」
佐藤「ぼくは、笑い声がイヤ。イヤらしい笑い方してるんだから」
田川「それは、そやね。ところで『ふるさと十勝』は佐藤さんの個人的な雑誌なん？　その点についてはどう思います」
佐藤「田川さんの方が緊張してるじゃない。ホラ、あそこに小さい建物見えるでしょ。今度悠治さんと三宅さんで来た時、田川さんあそこに泊まる？」
田川「あそこ？　あこはなに？」
佐藤「ロッジですよ、ロッジ」
田川「ロッジはもうええわ。それにしても、昨日より、雪よう積ってんね」
佐藤「ホント。ほら、車がこんなに滑ってる」
田川「わざとやってんでしょ。佐藤さんのパーソナル雑誌いうけど、若い人いっぱいいてはるやん」
佐藤「いっぱいはいない。林でしょ。それに渡辺くんに、飯田くんに加地くんかな」
田川「そういう人は、雑誌についてどう考えてんの」
佐藤「そりゃ、本人たちに直接聞いてみなけりゃ」
田川「そりゃそうやな。でも若い人とやることについて、佐藤さんの意見は、育てなあかん、とか」
佐藤「給料が若い人の方が安いから」
田川「ホンマ？」
佐藤「それもある。林なんか、景気の悪い時入ってきたから。ホントは年に一回ぐらいあげなくちゃいけないのに」
林「わたし、質が悪いから」
田川「そんなことないでしょ。ねぇ、固定費って月どのくらい」
佐藤「二百万。部屋代とか、人件費とか。特に人件費は営業の人がたくさんとるからね。昔、田川さんがやってたやつ」
田川「なんで知ってんの？」
林「十万広告取ってきて、やっと一万貰えるってのでしょ」
佐藤「田川さんの文章に書いてあったでしょ。だいたい、営業ってのは、人のいい人はダメね」
田川「ほめられてんの？　広告はどのくらい？」
佐藤「月百五十万くらい」
田川「ほんなら、たらんやん」
佐藤「ほかに、年間契約のがあるし、雑誌代もあるから」
田川「ほなら、赤字やないの」
佐藤「赤字ですよ。管理費でも月五十



万はかかるし、お手伝いの人にも時々ごちそうしたりしたげなくちゃいけないし。この頃してないけれど」
田川「るいせき赤字ってどのくらい」
佐藤「今のとこ三百万くらいかな」
田川「それは誰が負担してんの」
佐藤「ぼく」
田川「家売ってるの」
佐藤「山。じいさんの山売ってんの」
田川「そうまでして、雑誌やろいう情熱ってなんなの」
佐藤「十周年ていうけれど、ホラ、五年前に一回、この雑誌つぶれてるんですよ。二億の借金抱えて。信じられますか、タウン誌で二億の借金抱えるって。全国の新聞でニュースになったほどですよ。その頃はいろんなことしてたんですよ。ハンバーガーの店、デイリー・クイーンのチェーン店やったりスエーデンの掃除機売ったり。社員も三十人からいましたけど」
田川「ぼくのいた大阪労音見てるみたい」
佐藤「その時、ぼくはやとわれ編集長やってたんだけど、これでつぶしてなるもんか、と思って。経営陣といっしょにやめるなんて口惜しいから、一年間だけやろうと、引継いだんですよ。もともと『ふるさと十勝』ていうのは地域で文化活動をしていた田所さんという人が、北海道開拓の歴史を探ろうとしてはじまった。だから郷土史発掘がテーマになった。それが十回ほど出したところで、モリセイというこのあたりの財閥の人が、良い雑誌だからと引継いだのよ。この辺じゃ、地方誌っていうと、ともかく悪口書いて金貰うという〝ゴロ〟風のものしかなかったし。で、一時はすごく売れて『ふるさと十勝知らないものは若者ではない』といわれるほどで、年間一億ぐらいの商いをしてるぐらいだった」
田川「それにしては知らんかったな」
佐藤「その頃は全国でも売ってましたよ」
林「わたしも、東京にいたから知らなかったわ」
佐藤「で、まあ、そのいい時期は二年ぐらいで、倒産したらみんなちりぢりになったけど。中心のひとりは、そのあと東京へ出ていって〝ファイブ・ドア〟って、セックス産業の走りなんかやって、山本晋也やらとテレビなんか出てましたよ」
田川「いんのよね、そういうの。どこにでも。ともかく、それから佐藤さんがやり出して、方針もかわった？」
佐藤「方針よりもなによりも、文句いわれっぱなしですよ。広告とりに行くと、バカタレ、お前んとこ、オレんとこにまだこれだけ借金があるんだ、とかいわれたり――」
田川「それは全部クリアした」

佐藤「ま、はじめた人たちがなんとかしてくれたけれど、仲介に入ってた人が死んだりしてね。ちょうど、あのテレビが全道に流れた日ですよ。心労が重なって、四十二、三歳かな」
田川「それが、五年たって『野の音コンサート』やろうというほど余力がついてきた」
佐藤「余力、いうほどじゃないけれど会社も前のところから切り離し、他の出版物の編集も引受けて、それで年二百万ぐらいは出てたから。だけど、今年は北海道は史上空前の不況で、その仕事がなくなって、あせってますよ」

＊

佐藤「ともかく、北海道というところは、毎年本土から二兆円貰ってやっと成立っているところですからね。民間活力いうのが、なにもないのですよ。役所か、農協につとめる以外、東京へ出て行くしかないみたいなところでね。それが口惜しい。札幌なんかその典型みたいなところで、地元の産業はない。東京の支店があって、そこへ流れて来るお金でススキノがもっている、というカイライ国家、植民地ですよ。なんとか、地元で産業がおこり、トントンになればいいと思うのに。
　文化的なものも、そういう状態だから、独自のものが生まれてこない。こないだ九州に行ったけれど、九州も今はダメだっていうけれど、たしかに、五木地方なんかも、今はさびれてるけれど、やっぱり古いものが残っている。北海道は何もない。遺産もなく、中央に隷属している。だから若い人たちも気持がひがんでいる。自分たちに力はないんだと。そういう人たちが発言権を持つためにも、足場が出来なくては。こういうことをやっているというプライドを持てるように」
田川「それに『ふるさと十勝』は役立てるようになりたい、と」
佐藤「そこまで期待してないけれど、でも、農業を中心に、二次、三次産業をおこさなくては、と思ってますよ。もともと、北海道の農業は、アメリカ的、というかヨーロッパ的農業なんだけれど、それにしても、中央が無理矢理植えつけたみたいなところがあって北海道の人はまた、東京から金貰いなれてる。オレたちへんぴなところにいるから金貰ってあたり前、というか、もらいこじきみたいな面がある。それを直していかないと」
田川「雑誌には、それがどう反映していくの」
佐藤「農業問題はずっとやってますよ。だけど、正直いってこのごろですよ。全体をつかまえて書けるというのは。それまでは、自分が勉強するのにせい



いっぱいで。読んでるお客さんにとっては迷惑だったでしょうが。ぼくがこう思う、という意見でなく、現場のリポートだったから。地域の情報もつかめてなかったし。この頃になってやっと全体をつかめてきたという感じ」
田川「農業やってる人に読者も多いわけ？」
佐藤「そう、増えてますね。ともかくこっちがしっかりしないと、読者にはわかりますよ。自分たちがなぜそれをやってるか、はっきりしないと。でなかったら『ぴあ』みたいにやるか、あとは金もうけしかない。そういうのは卒業しないとね。若い人なんかとは、その点では難しいところがあるけれどスドーっているでしょ（かれは今、釧路へ移り、五月の『野の音コンサート』では、釧路の主催者をやってくれた）かれなんかも、はじめは〝こんなイナカくさいもの〟とか言ってたんだけど最近わかってきたみたいで」
田川「たしかに、抜きがたく、イナカというものはダサイ、というイメージが中央から流されてるね。今回もここへくる前に札幌の周辺四カ所、江別、恵庭、小樽、真狩って行って、若い人たちと話してきたけど、どこでも〝イナカ〟っていうと、ダサイっていう気持をありありと出すのよね。真狩なんか、人口三千ぐらいの過疎の村だけど若い人、小学生から二十歳ぐらいまでの人にアンケートをとったのを見せて貰ったけど、たいていそうなんだ。中には〝真狩に百貨店があればいい〟というのがあって、これにはみんなも大笑いしたけど。でも、テレビなんかでは、タモリにしろ、ビートたけしにしろ、みんな〝イナカ〟を笑いものにしている。で、それ見てるうちに、いつの間にか、イナカに住んでる人でさえイナカ、イコール、ダサイて、思ってしまう」
佐藤「でも、ぼくらにもあったでしょ。東京に憧れてる時期というのが。若い人には、時代の先端の刺激をうけなきゃ、というところはある。だから田舎でやる人こそ、ニューヨークやヨーロッパを見てこなくちゃ、という気はしますよ」
田川「だけど、そういうとこへ出て行ったら、もう帰ってけえへんとか」
佐藤「帰ってきますよ。だいたいこの辺の農業やってる人はみんな裕福ですからね。三千万ぐらいの貯金持ってやってるんだから。だから、北海道の中でも十勝地域は恵まれている。農機具なんかでも、ここで使ったものが、中古になって、北海道のほかのところで喜んで使われるんですよ。だから、十勝が不景気になると困るんですよ。誰も新しい機械買わなくなって、ほかの地域へ中古の機械が流れない」

田川「裕福やのに、景気が悪いの」
佐藤「産業構造がなんもないからね。農業と土建屋さんしかない。二次産業がなにもないから、バランスがとれてない」
田川「二次産業て」
佐藤「工業、というか。食品工業はあるんですけど、重工業とか機械工業とか」
田川「でも、そういうのが入ってくると農業で矛盾するんじゃない。公害とかおこって」
佐藤「重工業にかたよる、というんじゃなく。たとえば、今ここにデンマーク製の農機具が入ってきてる。大きな面積で効率よくやるためにテクノロジーも要求される。それも従来の大規模農業いうのではなく、エコロジーにもとずいた大規模農業、をやらなくちゃあ。バイオ・テクノロジーとか」
田川「でも、バイオ・テクノロジーなんかは、素朴な自然とかと相反したりはしない？」
佐藤「たとえば？　カエルのクローンとか」
田川「やたらようけとれるトマトとかそういうので、なんか気持悪い気いするけど」
佐藤「それはぼくらのテーマですよ。ぼくらの仲間でも水栽培やってるのもいるけれど、原点は土や、という意見もある。でも水栽培すると、今までは土の中にあってわからなかった根の構造なんかがわかってくる。それをまた畑に返す」
田川「バイオ・テクノロジーというとぼくなんかは、化学薬品とすぐ結びつけてまうけど」
佐藤「必ずしもそうでなく、有機農業の中でやれる。アメリカでは近頃大規模な有機農業やってるし。畑なんかも全部をおこさないで、種子まくとこだけおこすとか。それも技術でしょ。農機具なんか、ここ十年あまり変ってない。土の中に空気をためるのでも、針の穴みたいに、土に穴あける技術とかがあるし。トラクターも従来のは重いから、セラミックをもっと使うとか」
田川「そういう工業を、ここでやらなくちゃ、というわけか」
佐藤「ともかく、そういうことまで考えてほしいわけですよ、ここの人たちに。サイロの返却がなんぼ残っているとか、ウチをどうしようとか、嫁さんのきてがないとか、いうことだけでなくてね。地球的な使命に燃えて農業をやってほしいと思う。ほかのところにくらべて条件がいいわけだし」
田川「そういう佐藤さんの考えに共鳴する人もいんの」
佐藤「農業が今の時代の成長産業だと考える人はいますよ。そりゃ、農薬を使わない飼料でニワトリ飼って卵を作



ってる人とか、大がかりに機械を導入して有機農業やるとか、いろんなタイプの違いはありますけど。ホラ、ここのこの辺に山みたいに、堆肥作ってる人もいる。また勝手連の田村さんみたいに羊飼うとか、ランチョ・エル・パソの平林さんみたいに、食品に力を注ぐとか。ともかく農業と食べ物がこれからますます大切だと思う。そんな中で仲間の連帯はすごくあります。全国的にも水俣の〝甘夏みかん〟やってる人とか、加藤さんのダンナの藤本さんとか、アリス・ファームとか」
田川「ぼくかて、食べることや料理することに興味あっさかい、その材料が作られるとこにも興味持つねんけど、今回北海道でそういうとこ行って、いっちゃん強く思たんは、作ってる人と食べてる人の間に、なんか大きな壁みたいなんがあるいうことや。ぼくのやる料理なんか、恵まれてて、作ったらすぐ目の前で食べてくれはるさかい、反応とかすぐわかる。おいしかった、まずかった。もっとこうした方がええとか。でも農業やってる人と、都会でそれ食べてる人の間には、直接の交流があれへん。作ってる方にしたら、それがどこでどう食べられてるかわからへんから、つい、ゼニの問題、どうしたら、一定の土地でようけとれて、ようけ売れるか、でしか考えへんようになるんちゃうか、と思えてまう」
佐藤「だからこそ、その両方をつなぐものとして『ふるさと十勝』みたいなのがあるのではないか、と思う。いわばぼくなんかは、コーディネイターと思ってる。この辺の人は、開拓時代から三代か四代たって、やっと豊かになってきて、今はそれの楽しみを味わってるという感じ。次の課題はこうなんだというのを出していかなくては」
田川「豊かになって、みんな自分のウチでカラオケ・セット買うて、いうヤツか。なんかどこやったか、百軒のうち、九十九軒まで、カラオケ持ってるって聞いたな」
佐藤「そうですよ。全員持ってますよ」
田川「ホンデ、それが文化、ということになんのかな」
佐藤「あるっしょ。そういうもんが文化だと思ってるとこは、そこから目覚めてくれなくちゃ。いきなりそういう人に悠治さんの音楽やっても、わかってもらえないのと違います？　でも、カラオケってそのうちアキられるのじゃない」
田川「そうかなあ。どんどん拡大再生産されていく気するけどね。なんちゅうても、あれには一種の〝自己満足〟いうか、ニセの自己表現みたいなもんがあるさかい」
佐藤「それはそうだ。ね、ところで、お昼どうする？」

田川「もうおなかすいてきたん？」
佐藤「ソバぐらい食べない」
田川「ソバ。ええね。ええ考えやね」
林「そしたら、こっちの道行った方がいいんじゃない」
佐藤「遊ぶ時になったら、急に元気になってきたじゃない」
林「そんなこといわなくてもいいじゃない」
田川「え、これなに？ バッタ塚って」
佐藤「五十年ぐらい前に、この地方にイナゴの大群が押し寄せてきて、畑の作物をみんな食べてしまった。その時の名残り」
田川「そうか。あの温泉のビデオで見たヤツや。オショロコマの一年、というのか、その中で〝その時、白い蛇が出てきて、身体に赤いハンテンのある魚を食べよと告げ、それであの地方の人は、飢えをしのいだ〟というヤツ」
佐藤「それはあとで作ったんだけど」

＊

佐藤「でも、アイヌの人は、もう今はほとんどいないけれど、これからはアイヌのように生きていけなくては、とも思う。アイヌは作物でも全部とらない。アイヌネギでも根は残しとく。それと私有権、という発想もない。いたるところにカムイ（神）がいるわけだと。昔のアフリカと同じ。そういう意味では北海道にも伝統はある」
田川「なんか、自分が農業に近づいてるみたいで、へんやなあ」
佐藤「絶対農業です！ 今ここんとこに植えられてる秋まき麦は、雪にふまれないと育たないし」
田川「オショロコマも五カ月近い冬を卵ですごして春にかえるし、ビクも今花が咲いてるし。しかし都会にいるとそういうのはわからへんしなあ。だけどそのどこから、文化が生まれてくるのんやろか」
佐藤「中央と周辺の話になると、中央はいつも周辺をとり入れていってる」
田川「しかし、中央が周辺をとり入れる時は、いつもゆがめてるやん」
佐藤「たしかにそう。文化の話とは直接結びつかないけど、九州で一番ショックだったのは、あそこでは、雑穀、豆、玄米とかを作ってて、それを食べてるかぎり自分たちは死なない。ところがここ北海道の十勝では、そんなものは作ってない。作物は全部商品作物だから自分の物はナンもない。スーパーがなくなったら、みんな飢え死にしてしまう。アイヌはそうでなかった。鹿、ベガンコや松の実を食べて生きていけた。それが今じゃ、米も作ってるけど、インチキでしょ。ヤマトンチュが来て作らされている、というもの。そういう点で、なあんもない、ルーツ



が。カイライですよ。虚像」
田川「中央が自分に都合のいいもんをここで作らせている」
佐藤「経済的にも、文化的にも植民地ですよ。民話がない。地唄がない。マツリがない。この辺の人だって、作物ができたら嬉しいけど、それをマツリの形にまだできてない。作られたマツリはありますよ。雪祭とかね。収穫の喜びを祝うものがないそういうとこへ何かタネになるものを残したい。そうでないとさびしいじゃないですか。それを『ふるさと十勝』はやるのに役立つだろうと」
田川「でもそう考えてんのは、佐藤さんだけだったりして」
佐藤「編集会議じゃ常に話している。さっきも出てきたスドーなんかも、そんな中で変ってきて、自分でアジアへ行ってきて、今は釧路へ行ってガンバッテますよ」
田川「佐藤さんもアジアへ行ってきたら。ぼくなんかが見るのとはまた違う目でアジア見るだろし。北海道とはまた全然ちゃう。なんちゅうか、もうグチャグチャみんないっしょに生きてるというか。それが、今の日本じゃ、まずトシヨリを養老院入れて、カクリした思たら、今度は、こないだもテレビでやってててびっくりしたけど、登校拒否したら、精神病院へ入れられるいうねん。フィリピンとかバリとかじゃ、犬も猫もニワトリも人間も、それもヒヨコから大きいのまで、大人もこどももみんないっしょにわあって生きてる。そら、犬がニワトリ追っかけたり、朝の早からコケコッコーいうて起されることもあるけど、誰もケイサツへ電話して〝あそこのトリうるさい〟とかいえへん。そういうゴッチャマゼが、今の日本の都会では、どんどんのうなっている。いやワザとそうして、単一な部分、労働力として役立つとこだけ集めて、うまいこと生きてる、という風に見る。こら、おかしいんちゃうかなあ、って思うけどね。そんな中で、でも、ちゃうこと考えてやろうとすると変人あつかいされて、ちょっとうまいことといかんと、すぐザセツした気になる。真狩の若い人もそういうてたけど」
佐藤「アジアを見るいうても、マーケットとしてのアジアしか見てなかったり、消費の側からしか見てない」
田川「アメリカ、ヨーロッパは飽きたから次はアジアや、という発想で週刊誌なんかが、やれエスニックやどうのいうて持ちあげる」
佐藤「そんなのがモロに来ない点、イナカはいい」
田川「それがケツロンでっか」

# キリコのコリクツ

玖保キリコ

真夜中に仕事をしていて、ふと、人の気配を背後に感じる。

恐る恐る振り向くと、戸口に、ちょっとひざをまげておじぎをした妹が、無言で立っている。

最初、突然音もなく、しかも真夜中に人の部屋にやってきて、頭をたれている妹に、ひどくびっくりしたもののおじぎをしたままの姿勢で、「小僧寿司」という彼女の一言に、私は姉としての権威をかなぐり捨てて、喜んでしまった。

恐怖　⇩　笑い

という転換の図式が非常に気に入ってしまった私は、何度も何度も彼女に、『小僧寿司』をせがんだ。

『小僧寿司』というのは、御存じの方もいらっしゃると思うが、テイクアウト用の寿司を売るチェーン店であり、寿司屋の小僧が商人風のおじぎをしている絵がトレードマークとなっている。

妹も姉に自分の芸（？）が受けたことが誇らしかったらしく、私の部屋に来る度に、それをやってくれた。

妹は、まず、物音をたてないようにして階段を上り、私の部屋の入口の所に立ち、黙っておじぎをするのだ。もちろん、ちょっとひざをまげて。

つけ加えておかなければなるまい。妹はとても、商人風のおじぎがうまいのだ。

私がそのマネをしても、それはただのおじぎにしか見えないのだが、妹がひとたび腰をまげようものなら、どこからともなく、そろばんのパチパチジャラジャラいう音とか、「どーも」とか「まいどー」とかいう声が聞こえてくるような気がし、おじぎ以外の動作を何一つしていないのにもかかわらず見る者にまるで彼女がもみ手でもしているかのような錯覚をさせるのである。それほど、私の妹の『小僧寿司』におけるおじぎの表現力はすごい。

で、無意識のうちにそのような世界を展開させている妹に向って私が一言「小僧寿司」というとこの遊びは終わりになるのだ。妹はうれしそうな顔をして頭を上げ、部屋を出ていく。

おもしろいことに、妹は私の一声がかかるまでは、絶対頭を上げない。ただただ、じっと待つのみである。



いつのまにか、私と妹の間にはこの遊びに対する約束ごとが生まれてきて、二人とも暗黙のうちにそれを守ろうとしている。

「小僧寿司」という私の一言は、彼女にとって解放を意味している。それがなければ、彼女は、不自然なおじぎの体勢を続けなければならない。

だから、わざと彼女の存在に気づかないふりをして仕事を続けていたりすると、無言で無音ながらも、ばたばたとしている気配が伝わってくるので、思わず笑い出しそうになってしまう。

それを、ぐっとこらえ、さらに妹の存在を無視して仕事を続けていると、次第にその「ばたばた」が「ぜいぜい」に変わってくるのがわかる。

さすがに、ちょっとかわいそうになって、振りむきざまに、「小僧寿司」と短くいい放つと、妹はほっとしたように体を起こし、「ぜーんぜん、気がつかなかったぁ？」と、うれしそうに顔をくしゃくしゃさせて、部屋を出ていくのである。

私たち姉妹の間で、この『小僧寿司』はしばらくはやっていたのだが、そのうちマンネリ化してきて、やはりあきてくる。そうして、生まれたのが『小僧寿司』のバリエーションである『生首』である。

私の部屋は、階段の上りふちにあるので、階段の途中から部屋をのぞき込むと、ちょうど「首」が戸口のところにごろんと置かれてあるかのように見える。

ある日、やはり夜中で私が仕事をしている最中だったと思うが、妹がそういう風にして、何の気なしに私の部屋をそぉっとのぞき込んだ。

「また、『小僧寿司』だな」

と思って私はふり向いたのだが、いつもなら、目に入るべき位置に妹の姿がない。「あれれ」と思って、すっと視線を落とすと「生首」がにやっと笑って、こちらを見上げている。

夜中である。

生首がある。

思わずぎゃっと悲鳴を上げると、生首はいかにもうれしそうに、にたにたした。その悲鳴で起きてしまった母に「夜中に何を騒いでいるのか」と階下から怒られる姉を見て、妹の生首は、もう、うれしくてたまらず、顔じゅう口になってしまった。

姉に受けると妹は本当にうれしいらしく『小僧寿司』に代わって、今度は『生首』を何度もくり返した。

そして、私の「生首！」の一言で妹が去っていくという『生首』が私たちの間でしばらくはやることになる。

幼いときには、足手まといだと思っていた。どう彼女をまいて遊びに行くかが毎日の課題であった。

「でもね。大人になってからは結構楽しめるのよ。うちの妹って。『小僧寿司』とか『生首』とかしてくれるし」

皆もおもしろがると思って、私がそういうと、友人たちはみけんにしわよせ、私の意に反して、私を非難する。

「妹さん、かわいそう。いじらしい。けなげー。ひどい姉だな」

私は、妹だって私に受けて喜んでいるのだし、彼女だって楽しいのだから問題ないじゃないかと思う。

これは、私と妹の間にだけ成立し得る「遊び」なのだから。

「そーいうことじゃなくて。お姉さんに受けようとする妹さんの気持ちが、いじらしいじゃないか。その気持ちをもて遊んで楽しんでいる姉っていうのはひどい。サイテー」

と友人はさらに私を責める。

ぶつぶつ。

ひどいと言えば、私が子供の頃、妹なんかいらない、と騒ぎまくる時期があって、彼女に向かって、

「妹なんか欲しくなかった。ママは猫の子を生んでくれれば良かったのに」

という言葉を投げつけたことがあった。妹は、というと傷ついた様子もなく、というより彼女は姉に自分の存在を否定されたことに気がついていなかったのだと思うが、すぐさま、「にゃあ、にゃあ」と子猫になったフリをした。

「あれれ?」と思い、試しに「犬でも良かったな」と言ってみると、妹は、「わん、わん」と犬のフリをした。

「あの時は、さすがに私もかわいそうだなー、とは思ったけど。あはは」

この話を聞いた友人は、私を人非人の姉と決めた。

妹の名誉のために言っておく。

彼女は「おもしろい子」と言われることはあっても「変人」呼ばわりされることなどないノーマルな、気の優しい、力持ちの女の子である。

彼女の「変」は姉である私の前でのみ発揮されるのだ。私のみが、彼女の「変」を引き出し、彼女も引き出されることを楽しんでいるのだ。

と、説明しても姉が暴君であることには変わりがないのだが。

あー、お姉さんなんかいなくて良かった。

日曜の朝、TVを見ながら妹に、

「私、妹よりも弟が欲しかったなー。ハットリ君みたいな弟が」

と言うと、彼女は私に「にん、にん」とハットリ君のマネをしてみせた。



# ワープロ入門・弁解篇

津野海太郎

## 1

カタログとかマニュアルのたぐいを熱心に読む。入門書もきらいではない。ただし、たいていはタタミの上の水練にとどまり、そのさきにまですすむことはめったにない。かずすくない例外がワープロだった。

三年ほどまえ、東芝OA機器事業部長の山本直三という人が書いた『日本語ワードプロセッサの活用法』（オーム社・一九八一年）という本を読んだ。ワープロ原稿をそのまま版下につかった「日本ではじめての本」というふれこみであった。ふーん、もうこんなことまでできるのかと、とりあえず、その事実にショックをうけた。それだけではない。山本はかれらのワープロを、いままで受身いっぽうだった普通の生活人が、自分たちの本や雑誌を安く手

軽につくるための道具として読者に印象づけようとしている。つまり私が以前ガリ版について（いくぶんかはワープロに対抗して）述べたのとおなじことを、かれは、ほかならぬワープロのこととして語っていたのだ。へんな時代だなと思った。

東芝日本語ワープロ学校の校長をかねる山本の発言は「善意」にみちていた。それなりに新鮮でもあった。まもなく私はワープロを買った。この原稿も、それで書いている。もちろん『水牛通信』の版下もそう。「普通人のメディア」実現の切札としてワープロをすすめる山本恵三の「善意」は、ここにおいて見事に花開いたかのごとくである。

しかし、一つの機械にこめられた開発者のこころざしとその使用の実際とは、はたして、こんなにも調和的に合致してしまうものなのだろうか。信じがたい。だいいち山本の本に刺激されて私が買ったワープロは、かれが開発にかかわった東芝のJWシリーズではなかった。そのライバルともいうべき富士通のマイ・オアシス2だった。そして、それを開発した富士通の技術陣はといえば、個々の生活者にとっての必要を重視しようとする山本などとは対照的に、かれらの機械によって日本国家と民族の底力を象徴させたいと考えていたのである。オアシス開発部長・神田泰典の『コンピュータ――知的道具考』（NHKブックス・一九八五年）という本を読むと、そのことがよくわかる。

漢字は図形認識しやすい。速読むきである。ただし表記がむずかしい。

カナはおぼえやすい。しかし、カナだけの文章は読みにくい。

でも、心配することはないと神田はいう。日本の高度なエレクトロニクス技術はその両者のいいところだけを組みあわせて、書きやすいカナによって入力し、読みやすい漢字によって出力する「カナ漢字変換方式」をつくりあげることに成功した。なかんずく神田自身が考案した「親指シフト」によって、カナによる入力はいっそう容易になった。かくして日本語の「カナ漢字まじり文」はアルファベットを追いぬき、地球上で、もっともコンピュータにふさわしい先端的な表記システムになったというのである。

アルファベット民族はカナ漢字まじり文のよさを知らないので、漢字のよさを利用しようとはしていないが、そのうち使うようになるだろう。ひょっとしたら、カナ漢字まじり文はカラーテレビで、アルファベットの表記は白黒テレビぐらいの格差があるのかもしれない。カラーテレビを知らない人は、白黒テレビでも満足するのである。

ついこのあいだまで、おおくのコンピュータ技術者たちが「カナ漢字まじり文」の後進性をなげき、アルファベットの先進性をうらやんでいた。コンピュータを日本に根づかせるためには、日本語をカナ表記に統一しなければならないと主張する人たちさえいたはずである。それが、たちまち一八〇度ひっくりかえった。日本のエレクトロニクス技術がすぐれているのは、その背後に「カナ漢字まじり文」の伝統があったからである。いまにアメリカやヨーロッパも後進的なアルファベットを捨て、日本語にならってアルファベット漢字まじり文を採用することになるにちがいない……。

そうとうな野郎自大ぶりじゃないか。と、もしそう感じない人がいたら、ころみに、これを以下の引用文と読みくらべてみてほしい。

私たちが、ヨーロッパ語に置き代へて、日本語を、全アジアへ広めやうとしてゐるのは、結局に於て、日本語が、それらの国語より、はるかに進歩してゐるからだ。劣つた後れた、ヨーロッパ語に、進んだ、すぐれた、日本語を置き代へた方が、全アジア人の幸福であるからだ。それが正義であるからだ。

いまから四十数年前に出版された、『大東亜共栄圏に於る国語問題』というパンフレットの一節である。このパンフレットの筆者とおなじように、当時、おおくの日本人が日本語の優越性と、その「進んだ、すぐれた」日本語をアジアの「野蛮人」たちに強要することの正当性を信じこもうとしていた。諸民族の言語には優劣の差がある。劣った民族の劣った言語は、やがて優れた民族の優れた言語にとってかわられる。それが当時の日本人の言語思想だった。これと同質の思想を『コンピュータ――知的道具考』のうちにも発見できると私は感じた。気負った口調の裏側に文明開化以来のアルファベット文化に対するコンプレックスをこびりつかせている点でも、そっくりである。アルファベットにもとずくヨーロッパ語の言語的帝国主義（もしくはIBMの世界戦略）に反対して、おなじ言語的帝国主義を日本語によってやってのけようというのだ。

しかも、ここで特徴的なのは、言語の優劣を工業テクノロジーにうまく適合するかどうかという基準によって決定しようとしている点である。

おなじ基準を日本語そのものに適用すると、日本語をJIS（日本工業規

格）によって統一していこうとする考え方になる。一九七八年、通産省は漢字表記のＪＩＳ（情報交換用漢字符号系）として、アイウエオ順に配列した第一次水準漢字二九六五字、部首順に配列した第二次水準漢字三三八四字を決め、あわせて異体字や略字の整理をおこなった。「文字の制定は国家の一大事業である」と神田は書いている。それは「本来なら文部省の仕事であろうが、ここでは機械の規格ということで通産省の担当になり、漢字のコード化について大胆に工学的な解決をした」

これによって戦後の「国語改革」をめぐる論争のある部分は、ほとんど無意味なものになった。残りの部分――仮名づかいにかんしても、いずれなんらかの「工学的な解決」がはかられるのだろう。

こうした事態に対して、かつての論争当事者――とくに「改革」反対派の人々はなにも語ろうとしない。それがふしぎだ。しかし、いまこの点に深入りすることはしない。ともあれ、このようにして神田泰典を筆頭とする富士通の技術者たちは、オアシス・シリーズにかれらの愛国的なこころざしをぬりこめた。すると、どういうことになるのか。私は「普通人のメディア」派のすすめにのせられて、なんの気なしに「国威発揚のメディア」派のワープロを買った。その「国威発揚のメディア」派のワープロによって、まあ「普通人のメディア」といっていえなくもないようなものをつくってきた。なんだか奇妙である。山本さんにも神田さんにも申しわけないことになってしまった。

それがどのような性質のものであれ、ある機械を開発した人々が自分の制作物にこめたこころざしは、ついに当の機械の性格を決定するだけの力をもつことができない。ときとして、かれらは手ひどく裏切られる。これを「フランケンシュタイン博士の相対性原理」と呼ぶことにしよう。

たとえば山本直三の「善意」は、かれが属する企業によって、まっさきに相対化されてしまった。かれが『日本語ワードプロセッサの活用法』という本をだした翌一九八二年、東芝は「日本ではじめて六〇万円を切った低廉価ワープロ」ＪＷ１を売りだす。東芝だけではない。この時期、日本のエレクトロニクス産業の全体がパーソナル・コンピュータやパーソナル・ワープロなど、かれらの商品の買い手を企業から個人にひろげようと懸命になっていたのである。山本もまた東芝の中核スタッフの一員として、なにがなんでも普通人の自発的な必要を開発しなければならない立場に身をおいていた。私は「普通人のメディア」の必要を説く



かれの「善意」を疑わない。と同時に私としては、いくぶんか眉にツバしてそれを聞くほかないのである。

商品の構造は一枚岩ではない。そこにはいく筋もの裂け目が走っている。この開発者のこころざしへの一元化を不可能にする裂け目は、そのことによって使用者の自由を保証する。もちろん完璧な自由ではない。部分的な自由である。でも、それだって自由であることにちがいはないのだ。

おおかれすくなかれ、私たちは売り買いされる既成品を自分の必要にあわせて変形させながら生きている。ワープロだっておなじことである。ときに私はそれを開発者の意図に反した仕方でつかう。「フランケンシュタイン博士の相対性原理」によって、私がそうすることをかれらは拒むことができない。こうした変形の可能性にいっさい眼をつむってしまえば、結果として、それはワープロの力を絶対視することにつながるだろう。エレクトロニクスの力は大きい。しかし、だからといって、それを神秘化してしまうようなことは避けたほうがいい。

## 2

アナトール・フランスに「昨晩、アルファベットの起原について幽霊と交わした対話」という長い題のエッセイがある。

ある晩、かれが自室で原稿を書いていると、灰皿においた夕バコの煙のなかからフェニキア人カドモスの幽霊があらわれた。古代ギリシャにアルファベットをもたらしたとされる神話上の人物である。「なによりもまず私は商人でした」と、そのカドモスがいう。「私がアルファベットを考えだしたのは私の商売の便宜のためであって、のちに文学的民族が用いることになるだろうなどと予見した上のことではなかったのです。親しい友よ、努めて金持になりなさい。この世でよいものはただ一つ、富と権力なのですよ」――こういって幽霊はすがたを消した。気がつくと、もう夜が明けていた。「そして私はひどい頭痛がしていた」と終る話で、岩波文庫版『エピクロスの園』に収められている。

アルファベットが、はじめ商業上の必要にすばやく応じるための道具として発明されたというのはたしかなことらしい。

ことわるまでもなく、私たちはカドモスではなく、アナトール・フランスの徒である。とすれば、いまさらワープロ程度のことでガタガタすることはない。文字にはじまって印刷術にいたるまで、私たちは「富と権力」実現のためにつくられた道具や技術を、「富

と権力」以外の目的のために勝手に利用させていただいてきた。はじめから自分の目的にふさわしくつくられたものを、なんの工夫もなく素直につかってきたのではないのだ。ただし、それはまた、いつも私たちは後手にまわるしかなかったということでもあろう。「ひどい頭痛」になやまざるをえない所以である。

一九七三年三月、ドイツの詩人エンツェンスベルガーが来日して、朝日講堂で公開討論会をおこなった。日本側の出席者は針生一郎、東野芳明、寺山修司など。客席にいた中野孝次が、かれの翻訳した『メディア論のための積木箱』（河出書房新社・一九七五年）の「訳者あとがき」のなかで、つぎのように当日の雰囲気をまとめている。

……討論はエンツェンスベルガーが、諸国の実例をひいてマスメディア（主にテレビ）の革命的使用の可能性を論じるのにたいし、日本側講師が一人ひとり意見をのべ、通訳を通じてディスカッションを行なう形で行なわれた。前者の意見が理性的希望にみちているのにたいし、後者の意見が、日本におけるその可能性の乏しさ、絶望的状態の強調と、その見地から前者をオプティミズムときめつける傾きが強く、討論は双方の一方的主張に終始した。

私はその場にいなかったので正確なことはわからないのだが、前記『メディア論の積木箱』の主張から推測するに、たぶんエンツェンスベルガーは、「決定的なメディアは敵の手にあるという完全にただしい認識」によって、ともすれば、かんたんに「敗北主義」におちいってしまう「左翼」的傾向について、批判的に語ったのであろう。

「この事態に倫理的な憤激をもってぶつかるのはあまりにも素朴すぎる。敵を魔力の持ち主にしたてることは、みずからのアジテーションの弱点と展望の欠如をおおいかくす」うんぬん。

アナトール・フランス同様、エンツェンスベルガーにも、われわれは「富と権力」実現のためにつくられた道具や技術を、「富と権力」以外の目的のために利用していくしか手がないのだという認識があった。左翼も非左翼も反左翼もない。その認識が日本側の出席者からはきれいに脱けおちていた。「理性的希望」ねえ。「オプティミズムときめつける傾き」ねえ。そうかなあ。かれの「メディア論の積木箱」は、アントニオ・グラムシの「理知のペシミズム、意志のオプティミズム」というエピグラムによってしめくくられていた。「ひどい頭痛」といっても、まったくおなじことだったのではあるま



いか。

あたらしいメディアが出現する。たとえば一九二〇年代に本格的な放送を開始したラジオの場合——ヨーロッパの知識人と日本の知識人が、それぞれにどう応接したかを比較してみよう。

ラジオにとりくむヨーロッパ知識人の二つの典型的な態度を、一九三〇年代のベルトルト・ブレヒトと一九四〇年代のジョージ・オーウェルに見ることができる。前者は「受信機をそのまま送信機につくりかえることができる」という技術論的な立場から、ラジオ・ネットワークの国家占有を外側からくつがえし、それを（古い活字文化にはのぞめないような）双方向システムに具体的につくりかえようとした。後者はBBCのインド向け戦時宣伝番組にかかわり、それを内側から変質させて、日常的な放送の場ではとうてい実現できないような高度に知的なプログラムをつくろうとこころみた。どちらの場合も、たしかに結果はさしてはかばかしいものではなかった。しかし、ともかくも、かれらは「ひどい頭痛」になやまされることをおそれなかったのである。

では、日本の場合はどうか。たとえば一九三〇年代の長谷川如是閑もブレヒトとおなじように、ラジオを「歪められた量的勢力」に抗して「反対の量的勢力」を組織する「ほとんど唯一の、もっとも有力な機械的方法」と見なしていた。

如是閑は永井荷風のような反ラジオ主義者ではなかった。むしろ国家占有とは別の仕方でラジオをつかう可能性につよい関心をもっていた。にもかかわらず、かれのごとき大ジャーナリストがそのためのシステムづくりに具体的にのりだすというような事態は、この国ではいっさい起こらなかった。あるいは一九四〇年代のオーウェルに、おなじころNHKの芸能部ではたらきはじめた久保田万太郎をくらべてみてもいい。これまでとは異質なラジオ番組の可能性などには眼もくれず、どぎつい権力闘争にあけくれる。それが国営放送で久保田のやったことのすべてだった。

ブレヒトやオーウェルのこころみはそのものとしては失敗したが、かれらの構想は一九六〇年代の末にはじまったヨーロッパ諸国の自由ラジオ運動にひきつがれる。エンツェンスベルガーの発言の背後には、こうした集団的な実践の蓄積があった。そして日本側の出席者はといえば、「日本における可能性の乏しさ」という当りまえの事実をいいたてることによって、「ひどい頭痛」覚悟で、あえて恐いものにさわるような面倒（「メディアに対する接

触不安」とエンツェンスベルガーはいった）は回避することに決めてしまったのである。シンポジウムのあと、エンツェンスベルガーは「なんでもわかってるのになにもしない人たち」という寸鉄詩を一つ書いたそうだ。

しかし、日本人にだって「富と権力」のために開発された技術を、それとは別の目的のために意図的につかいこなしてきた経験がないわけではない。ほかならぬガリ版がそう。みかけの素朴さにだまされてはいけない。一八九四年、もと内務官僚だった堀井新治郎と商事会社社員だった二代目新治郎父子がガリ版印刷術を発明したのは、なにも「普通人のメディア」が必要だと考えたからではなかった。

……繁雑な文書事務を処理するにあたり、同文通信の必要ある場合、何等か適切な手段方法によらなければ一官庁、一商社の不利不便のみならず、一般文書事務界の損失は莫大となり、国家文運の前途にはなはだ憂慮すべきものがある。（『日本発明家五十傑選』）

かれらはまぎれもないカドモスの子孫として、「富と権力」のためのOA機器を開発した。それが堀井父子のこころざしだったのである。このことを私は田村紀雄・志村章子編著『ガリ版の文化史』（新宿書房・一九八五年）によって知った。事実、かれらの発明品が飛躍的に売れはじめたのは、日清戦争で大本営と陸海軍がガリ版を大量に採用したからだった。その後も、軍隊、官公庁、学校、商社を中心に販路をひろげ、大日本帝国の力に支えられて中国や朝鮮にまで進出していった。大正時代になっても、まだガリ版は、「現在のパソコン以上に高価なビジネスマシン」だったらしい。

その後、小学校教師たちの綴方運動をはじめとするさまざまなこころみのなかで、ガリ版は「普通人のメディア」のための道具としてもちいられるようになった。その結果、私たちはガリ版をそのようなものとして考えることになれてしまった。

しかし、ちがうのだ。私たちの先人は、ガリ版をなんの抵抗もなくつかいはじめたのではない。なによりもまず「国威発揚のメディア」として開発された道具を自分たちの手もとにひきよせ、それを別の目的のために利用したのである。「小さなメディアの必要」をいうことは、小さなメディアを実体的にのみとらえて、大きなメディアに「倫理的な憤激をもってぶつかる」こととはちがう。「富と権力」を実現したり維持したりするために工夫されたものを、そのつど、べつの目的のため



につかいかえていく。そのことをバカにしていると、私たちはどんどん狭いところに押しこめられてしまいかねない。大きなものでも小さくつかうことができる。いつもそうとはかぎらないだろうが、その可能性を自分から捨てることはない。

〔追記〕

摸索舎の十五周年を記念して、去る十月二十七日、「ワープロは現代のガリ版か？」という主題のあつまりがあった。以上は、その席上で私が考えたり発言したりしたことの半分である。あとの半分も、いずれ機会があったら書かせてもらう。

大きなメディアとはちがって、小さなメディアの場合、その前提となるのは少数の人間たちの関係である。もしワープロをつかうことがその関係をこわしてしまうとしたら、「ミニコミ」にとってワープロは適当でない道具だということになる。そうでないとしたら、とりあえず、ワープロは「ミニコミ」の役に立っているということになるだろう。いまのところ水牛通信は後者の例たりえていると思う。しかし、その経験や判断をほかの人々に押しつけるつもりはさらさらない。

いずれにせよ、われわれ大人はワープロ程度の道具なら、どのようにでもつかいこなすことができる。それによって自分の文章が変わるというようなこともない。だが、まだ文字を知らない子どもの場合はどうだろう。残りの半分は、その疑問にかかわる。

漢字が書けないので文章を書くことをきらっていた子どもたちが、ワープロを知って、パンチのきいた文章を「メートル単位で」書きはじめたという話を、しばしば耳にするようになった。かれらの埋もれていた力がワープロによって解放された。どんなに情なくとも、その事実をまずみとめなければならないと私は思う。問題はその先だ。かれらは解放されると同時に、エレクトロニクスによって強化され口あたりのよいものにされた古い文字体系のうちに、もういちど閉じこめられてしまったのだから。

いつどのようにして、かれらは自分の文章が東芝や富士通の表記システムにしばられていることに気づくのか。なにが気づく力をやしなうのか。もちろんワープロではないだろう。ワープロを怪物視せず、ワープロごときに呑みこまれない教育（制度的なものとはかぎらない）が必要になる。自分の必要に応じてワープロをつかうのは、ワープロに対する批判を捨てるのと同じことではない。「倫理的な憤激」だけではどうにもならんのよ。

# 料理がすべて

田川律

今月の最大のオドロキは〝棒卵〟である。川崎の生活クラブ生協ではじめてこの言葉を聞いた時は、なんのこっちゃと思った。よく聞くと、都会では卵をいっぱい集めて、白身と黄身にわけ、これを一本の長い棒状にゆでて、金太郎飴のような卵に仕上げるという。どこを切ってもゆで卵。そのかわり、あの半月状の端がない。レストランではこれをもっぱら使うという。エッグ・サラダや、ハンバーグのつけ合わせとかに。なるほど、発明、かもしらんけど、ケッタイヤ。

そういえば、つい三日ほど前に友人のCさんに貰ったお土産のカマボコは白地に赤く平仮名で〝とやま〟となっていた。これまた、どこを切っても、〝とやま〟なのだ。富山県を忘れないこと、これに勝るもんはない。

久しぶりに、ロースト・ポークを作った。豚のかたまりを買ってきて、タコ糸でぐるぐるまきにして、塩、コショウを塗りたくる。ほかにパプリカとか、ふだん使わない香辛料もてき当に加えた。温度計のこわれた、もう十年も前に、友だちがどっかから拾ってきてくれたガス・オーブンの皿に、バターをひき、レモン、ニンジン、セロリの葉、などをブツ切りにして、肉のまわりに置き焼く。だいたい一時間ぐらいででき上り。皿に半ば炭化した野菜類と、肉汁が残るので、これをフライパンにうつし、ウースター・ソース、トマト・ケチャップ、ワインなどを加え、グレイヴィ・ソースを作り、これを先のロースト・ポークをスライスしたものにかける。今回はでも、炭化が少々行きすぎて、焦げくさいグレイヴィ・ソースになってもうた。

およばれ、しておいしかったので教えて貰った料理。①牛タンの塩ゆで。丸ごとのタンにコショウを振り、ナベに荒塩二袋分を敷き、そこへタンをのせて、四十分むし焼きにする。それだけだが、けっして塩からくならず、じつにおいしい。②鮭のマリネ。ぼくは生で作るが、これは生鮭の厚切りを、バターで、ざっと焼いて、玉ネギなどと酢につける。生よりもほっこりして食べやすい。

鮭といえば、いつも思い出すのが、ひとに聞いた話。NHKのラジオのアナウンサーが、クラシック小品をかけてDJしている時、ついつい「次はシューベルトの〝鮭〟」といったそうだ。それも江戸っ子らしく〝サケ〟といわず〝シャケ〟といったそうな。放送のあとで、その人がどうなったか、は話をしてくれた人も知らなかったが、ぼくなんかも言いそう。

もうひとつ鮭の話。こないだ帯広へ行った時、市内最大の魚市場〝ソーダ水産〟へ寄って、なんぞ買お、と思って見てたら、小さい塩鮭が一匹千円ぐらいでいっぱい売っている。いっしょにいった地元のHさんの話では「あれは〝ホッチャレ〟といって、土地の人は食べない、川をのぼってきて、産卵を終えた鮭だ」という。〝ホッチャレ〟とは、捨ててしまうの意らしい。

それでも、まだそうして捨てられずに塩ずけされてるだけまし。札幌の豊平川では、〝カムバック・サーモン〟運動の〝成果〟で、豊平川へたくさん鮭が帰ってきたのはいいが、始末に困ってダンプカーに乗せては、肥料用にどこかへ大量に捨てられているという。東京の多摩川でも、そろそろ帰ってくる頃だけど、どうすんねやろ。これこそ、思い上った人間のあやまった善行の良い例とちゃうか。

およばれでもういっこ忘れてた。自分で作らないから、知らなかったのに〝白あえ〟がある。豆腐で作るとは知らなかった。柿の白あえ。木綿豆腐をしっかりしぼる。スリ鉢にごまを入れてしっかりすり、塩と少々砂糖を入れ、そこへしぼった豆腐を入れて、てき当に切った柿を加えてできあがり。あんまりぼくとあわん上品な味やった。

函館からダンシャク芋を贈ってくれたので、肉じゃがを作った。牛コマと玉ネギで作るごく普通のヤツ。ひとつ困ったのはいったん食べて残って冷えた時。汁気はほとんどないし、ましておいておくといよいよなくなる。次食べる時どうするのか。うんととろ火でふたして温めたらうまいこといくか、と思ってやってみた。ちょうど本号の「工房訪問」の原稿書きながらやっていて、気がついたら芋の匂いがするのであわてて火を消したが見事にナベの底は焦げついていた。あのての煮物については、みんな残ったらどうやってあっためんのかな。電子レンジ持ってる人はべつや。そやから電子レンジが売れてんのやろか。

帯広からは、ソーダ水産で、生のエビとハマグリを買って帰って、エビはそのまま食い、頭は塩焼きにして、ハマグリは、酒ムシらしきものにして食べた。〝らしき〟というのは、ナベにハマグリをほり込んで、酒かけてむして、みんな口開けた頃シュウユをかけただけだから。ホンマはもっとデリケートに作るのとちゃうやろか。

ほかに、先月に続いて、今月もタラ豆腐を何回か作った。具は、ゴチャゴチャ入れない方がおいしいみたい。レモンよりスダチやユズが合う。

# 映画時評

## 鎌田慧

テレビで、浦山桐郎の『キューポラのある街』をみた。死なければ、いまごろ放映されることのない映画だったかもしれない。おそらく、彼は不器用に生きたのであろう。この映画には彼の、あるいは当時の若い映画人たちの初心、といったようなものが映しだされている。

いまさらいうまでもなく、この映画では川口（埼玉）の鋳物工場ではたらく「職人」の娘（吉永小百合）の眼を通して、五〇年代の日本が描かれている。クビになったり、飲んだくれたり、仲間と喧嘩をしたり、労働組合におっかなびっくり加わったり、そのころの町工場の労働者とその家族は、吉永一家のように暮していた。そのリアリズムがみずみずしい。寅さん映画にも、ときどき町工場（印刷屋）が登場するが、あの「庶民」万歳主義を押しつけ工場内の対立にまったく思いの及ばない山田洋次など、桐山の爪のアカでもせんじて飲んだらどうだ。『キューポラのある街』の明るさは、哀しいまでである。あのころ、世の中はもっと単純にみえていた。労働組合は正義だったし、社会主義は未来だった。

駅頭では北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）に帰るひとびとが送りだされていた。跨線橋に立っていれば、その下を〝北〟に帰る友人たちの乗った列車が通りすぎ、手を振りながら遠ざかっていくのがみえる。映画のワンカットは、全国のあちこちで実際にみうけられたものだったであろう。すこしまえまで、道を歩けばいろんなものに出会った。争議中の赤旗やデモや機動隊の装甲車。街にはいろんなものがあふれていた。

吉永小百合は、高校に進学せず就職して夜学に通う決心を固める。その前後につくられていた今村昌平の『豚と軍艦』のラストシーンでは、吉村実子が川崎の女工になるべく歩きだす。あのころ、出発は期待されていた。それぞれが何かにむかって歩いていった時代だったのかもしれない。が、いま、寅さんなんかはすぐ帰ってきてしまうんだからな。誰もどこへもむかわなくなってしまったのかもしれない。

ミヒャエル・フェアヘーヘンの『白バラは死なず』は、ミュンヘン駅への列車の到着からはじまる。兄のあとを追って、妹もここの大学に入学しにやってきた。一九四二年のことだった。

大学で妹は反ヒットラーの反戦ビラを受け取る。まもなく、彼女は兄と三、



四人の仲間がそのビラをつくっていることを知る。「白バラ」の地下運動は彼らの手づくりのビラによってほかの都市まで拡がり、教授もまきこみ、ほかの反政府運動ともつながりだす。

この映画での運動は、ビラの印刷、運搬、そして配布の三つに局限されている。

秘密の印刷工場は、やはり地下室である。部屋のまん中に、タイプ原紙を使う謄写式の輪転機が据えられている。機械はゲステットナー社のものかもしれない。インク止めのスクリーンが破れると、外に出て国旗をはずして持ってくる。そのころになると、外は国旗だらけである。

戦後世代やいまの青年たちが気づいていないのは、紙の手当の問題である。配給制だから、文房具屋で買うわけにはいかない。最初のころは、協力者になった教授への割り当て分を使うが、それも切れてしまうと市役所の戸棚から盗んでくるしかない。物質過剰の時代に慣れてしまったものには、紙の手当はひとつの盲点である。

ビラをすこしずつカバンに詰めてはこぶのはどこでもおなじである。白バラのグループは、郵送をひとつの重要な手段にしているが、こんどは切手の手当が大問題になる。大量に切手を買うものは、郵便局で怪しまれてしまう。

大学構内では柱のかげに置いたり、階段に一枚ずつ置いたりする。非合法だから手渡すわけにはいかない。踊り場に置いたビラが風に吹かれて降ってくるころは、すでに包囲網も縮まっている。

紙をはこんだり、夜行列車で印刷機をはこんだり、秘密警察の眼を逃げまわりながらビラは発行しつづけられる。捜索も見近にせまり、やがて結末にちかづくのは、登場人物たちの疲労の表情からうかがうことができる。

「白バラ」はごく少数のグループだったが、政府には心穏やかならざる存在だったようである。状況が押し詰まってしまえば、たかだかビラでさえ、最大の武器になる。真実は語りつづけられなければならない。おなじころ、日本でどれだけのビラが配布されたであろうか。共産党が弾圧されてしまったあと、ほとんどなかったようである。

学生たちの個人的なつながりが、政府によくたちむかい、ビラの読者を励ましていたことを監督は主張したかったのであろう。戦中の日本の抵抗のブザマさと現在の無抵抗を重ね合わせてみれば、この映画をみながら恥ずかしくなる。

逮捕された白バラグループは、処刑される。ビラで死刑である。この判決は、連邦最高裁判所で、いまなお有効とされているとか。

# 音楽時評
## 高橋悠治

今年最後の時評。いままでをふりかえってみると、関心がどうしても近くにいる人たちの活動にもどってしまうのだった。もっとほかのところで、ちがうことが起きていないだろうか、とおもってレコードを買ってみる。フィリップ・グラスの映画音楽「ミシマ」とかジョン・アダムスのオーケストラ曲「ハルモニー・レーレ」（調和のおしえ）などは、コード・パターンを私有してミニマルしている。こういうのが体制化した70年代前衛なのか。キップ・ハンラハンのレコード2枚。タジマハール、ジャック・ブルース、カーラ・ブレイ、レスター・ボウイ、デヴィッド・マレーたちが、ブラジル・ビートにのってここちよくニューヨークしている。うまくて何のおどろきもない。成熟と老化はどこがちがうのか。いけないいけない。

ただひとつおもしろかったレコードはザ・ハッピー・エンドの「カネほどつよいものはない」。ブレヒト、ヴァイル、アイスラー、ビクトル・ハラ、アイヴス。ビッグバンド編成だが、プロにはとてもできないようなおもいきったアレンジと演奏。30年代の政治的ストリート・バンドから影響されたというが、スクラッチ・オーケストラやポーツマス・シンフォニア以後のあたらしいかたち。「東方紅」や「コマンダンテ・チェ・ゲバラ」がなつかしさとアイロニーをこめて顔をだす。志をうしなわず、しかもさめていること。つめたい目とあつい心。これは毛沢東だったな。

今年買ったレコード数十枚。いつかききなおしてみたい。ちがう角度から何度もききなおせる音楽がどれほどあるか。

11月はじめにエリオット・シャープがきて、11月おわりにネド・ロセンバーグがきた。二人ともまたきたいらしい。ニューヨークは高くてひとがこない。東京のほうが、さまざまな人たちとの交流がある、とシャープがいっていた。だが、ここではおなじ音楽を二度もってくることはできない。すぐあきられてしまう。ここの人間もおなじことをくりかえしている。ちがう人と組んで変わったように見せているだけだ。ニューヨークだっておなじようなものだろう。よそでは新鮮にきこえても、その土地では飽和状態だ。

場所や相手を変えるのでなく、自分がくりかえしのなかで変わっていくためには、それができる環境をととのえることも必要だ。おなじものしかききたがらない音楽愛好家たちと、最新情報しかうけつけない消費者たちとの中間に、自分のきき手と出会う場をもとめて。

それはわかっているのだが、東京のようにいそがしい場所で毎日ちがうしごとをこなしているうちに、だいじなことはどこかへいってしまう。いま何をしているのか、たずねられてもこたえようがないことがしばしばだった。自分のしごとだとおもったものも、できあがってみるとだれかの企画したイベントに奉仕しただけだったりする。別に自分ひとりのために音楽をやるわけではないが、「やった」ということだけが何日か記憶にのこる、というのでは労働力を売っているのと変わらない。

規模が大きいものほどそうだった。オーケストラやオペラの作曲家や指揮者は、メカニズムを支配しているつもりで、じっさいには駒のひとつになっている。そして客席を見ても人間の顔が見えなかった。やはりマスメディアには向かない、五十人からせいぜい三百人相手のコンサートがいい。それ以下では生活できないだろうし、それ以上になると生活がなくなる。

ちいさなメディアを手ばなさず、マスメディアとは一時的関係しかもたない、というだけでは充分ではなくなった。むこうからはいりこんできて、足もとをくずしていく。消費光線で枯らしてしまう。おそらく体制は、いままで無視してきたものをとりこまなければやっていけないのだろうが、結果は革命や改革ではなくて、すべてをまきこむ共倒れの可能性がつよい。そうさせないためにどうしたらいいのか、それはわからない。さしあたりのこたえは、できるだけ働かないことだが、自分のためのしごとも当然そこにはいるから、これはむつかしい。最少限のしごとのスタイル。オーケストラにふくれあがってしまったミニマル・ミュージックのかわりに、しごとのミニマリズム。そして生活の。ただし省エネや「自然にかえれ」ではなく。

あるいは、準備と練習。パフォーマンスのための準備と練習ではなくて、準備そのものになってしまうこと。

さあ、虚空にむかってのおしゃべりはこの位にして、この音楽時評も、もうやめた。来月からは映画時評をやることにした。そのほうが、たいていのコンサートやレコードよりはおもしろそうだから。

坂本龍一さんが、音楽のコラムをひきついでくれます。来月は新鮮でスリリングなレポートをよむことができるでしょう。それじゃ、またね。

# 水牛かたより情報

●『日系アメリカ・カナダ詩集――世界現代詩文庫9』中山容・新井弘泰編・訳。土曜美術社。九八〇円。

アメリカ・カナダにおいて、日本人を祖先に持つ人々の詩を集めたもの。七〇年代なかばに、何人かの友人がアメリカに渡り、そのまま日本に帰る金もなく暮らしている。かれらははじめ露天商を営んでいたが、次第にもっと安直にお金を稼げる方向へ傾きつつある。そういう友人や、日系三世、四世の友人がふえるにつれて〝日系アメリカ人〟は、身近になった。

ここで語られる〝アメリカ〟は、ふだん雑誌などにはめったに出てこないアメリカ（カナダ）であり、それは、ふだんぼくらが知らされているアメリカが白人アメリカ（カナダ）であるに過ぎないことがわかる。同時に、かれら詩人の中に、日本とアメリカ（カナダ）が混乱しつつ存在していることがくっきりと浮かび上がってくる。

（田川）

●少女マンガのイメージ・レコードはあの名作『風と木の詩』をはじめとして、たくさん出ているが、すべてはマンガの作者とは別の作曲家がつくっている。だから聞いたことがない。しかしここにとうとうマンガ家自身がすべての作詞をし、ほとんどすべてのヴォーカルを担当し、作曲も1曲あり、という興味をそそられるコミックスのイメージ・レコードが誕生しつつある。題して『シニカル・ヒステリー・ワールド』もちろん玖保キリコさんです！「音できくシニカルよ」と彼女は自信に満ちあふれていたが、はっきりいって想像がつきにくい。だからどうしても聞いてみなければ。シングル2枚組で、ジャケット・デザインも彼女自身。作曲はピッキー・ピクニックだって。通信販売で一月下旬発売予定、千五百円ぐらい。こころひかれる方は、

〒153 目黒区駒場郵便局止
パニックレコード係

まで、60円切手を貼り住所氏名を明記した返信用封筒を同封して送ると、折り返し詳しいインフォメイションと、レコードの申し込み用紙が送られてきます。この情報は、玖保キリコの専属誌である『LaLa』と『水牛通信』にしか掲載されませんが、『LaLa』の読者



というのは、記事をみたとたんに行動を起こすひとたちですから、油断は禁物。水牛のほうが早く発売されるのをさいわい、さっさと申し込んでしまいましょう。

（八巻）

●鎌田慧『ドキュメント　人間』（筑摩書房　千二百円）

「日本の大部分の人間は愚直なひとたちだが、この人たちが最後には歴史を動かすのである」と著者はかいている。だが、ここに登場する人たち、知っている人でいうと、小泉英政、愚安亭遊佐、保坂展人は、この本の帯がいうような「ごくふつうの人びと」とはおもえなかった。かれらが「路傍の石」だとしたら、その路を通る人をつまづかせずにはいないだろう。「頭のいい人間」は、いまや成功や権力をめざして走るよりは、知る人は知る程度のところで好きなように生きている。人びとがあたりまえとおもうことにさからう人たちがいる。これは「ごくふつう」とはいえないことだ。なめらかな流れに角をたてる人には、みがかれた石の美徳は欠けている。かれらとつきあうのはつかれるが、おもしろくてやめられない。そういう人たちは身のまわりに、おもったよりはたくさんいるが、多すぎるほどではない。

かれらをごく身近に感じている著者についても、おなじことがいえるだろう。類は友を呼ぶのだ。

（高橋）

●実験バンド（三宅榛名＋高橋悠治）新宿モーツァルト・サロン。1月16日（木）17日（金）7時。前売二千円。当日二千五百円。予約はアートフロント☎461・3172。

来年は、よけいなことはできるだけやめて、これでいこう。バンド名もつけたし、あたらしい気分で。これは隔月一年間のシリーズ。ピアノとシンセで新曲とレパートリーから。（高橋）

●今月の工房訪問先の佐藤隆則さんや月刊誌「ふるさと十勝」をもっと知りたい場合の連絡は

帯広市西6条南6丁目井上ビル3階
北の編集室
☎0155・25・3976まで。

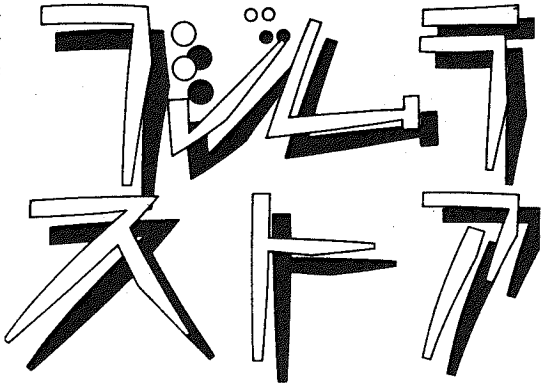
水牛通信　毎月1回10日発行　1985年12月10日発行　通巻77号　1980年5月23日第三種郵便物認可

## 編集後記

今年最後の編集後記――。

水牛通信は購読料でなりたっている。印刷代と郵送料と、それに来年いっぱいはワープロのローンとを購読料でまかなう。原稿料は、ない。それでも書きたいという人が書いている。購読料の前払いが、いつも振替口座になにがしか蓄えられているので、それが続く限りは雑誌のほうも続いていくというわけだ。先月の座談会で、鎌田さんが「赤字になったっていいんだもんな。なったらつぶせばいいんだから」と何度も言っているように、赤字になったら即廃刊だよ！　赤字ということは読者の支持をうしなったということなのだから。十二月は購読料切れの人が多いので、ついこんなことをかんがえる。

来年はトラ年。水牛には年男が四人もいる。これを記念して新春放談「トラの親、トラの子を語る」を予定しています。トラ年の一年間はせいぜいトラたちに迫ってみることにしたい。時評は選手交替。デイヴィッド・グッドマンさんの連載がはじまる。　（八巻）


水牛楽団＋矢川澄子＋如月小春
定価二三〇〇円（送料サービス）
夜還いの曲　しずくの曲　祖母のうた　最後のノート　だるまさん千字文　ワルシャワ労働歌　花巻農学校精神歌　ボクハソンケイスル　都市　★編集部あて郵便振替で申し込んで下さい


*予約講読の申し込みと送金は郵便振替を利用してください。
口座名　水牛編集委員会
口座番号　東京四―九一七九二
購読料　一年分三〇〇〇円（送料共）
住所、氏名、電話番号、何号からと明記。

*本誌は次の書店にあります。
模索舎（新宿）☎三五二―二五五七
ブックイン（阿佐谷）☎三三〇―七八九七
信愛書店（西荻窪）☎三三三―四九六一
ワンラブブックス（下北沢）☎四一一―八二〇二
アール・ヴィヴァン（西武池袋店12F）
カンカンポア（西武渋谷店B館B1）
ストアデイズ（六本木ウェイブ4F）
名古屋ウニタ書店　☎七三一―一三八〇


水牛通信　第七巻第十二号　一九八五年十二月十日　定価二〇〇円　発行人＝堀田正彦　発行所＝水牛編集委員会　〒154
東京都世田谷区新町2―15―3八巻方
電話〇三（四二五）九六五八　振替口座東京四―九一七九二　印刷所＝㈱トライプリントショップ